

郷里に想いをよせて

名古屋市長

大坪満男（三和区弘沢出身）

春夏秋冬、自然豊かな郷里。春には草木が芽吹き、野山は緑に色なし、そして草木の花が咲きみだれ、秋には黄金の稲穂がこころを下げ、木々の実が稔り。妙高連山を望み自然の恵みが一杯の郷里、山あり川あり点在する民家が集落を形作っている。日本の原風景ともいふべき光景が今でもそこに有る。

しかしいまこのような集落の多くが高齢化と居住者の減少の危機に瀕している。

小生は、郷里を離れ五十七年になる。小生の生れた集落は当時十二戸あったが一戸減り、また一戸減り、現在は六戸となり半減しているのが実態である。

日本の農山村ではほんの一部地域を除いて同じような現状だと想う。

高齢化した世代は働き手に事欠きながらも作物を作り、住み慣れた土地と家

守って住み続ける事を望みながらも職を求めて町へ転居した子供たちが時には農作業の手伝いに、冠婚葬祭、見舞等で折にふれて親元に向き集落とのコミュニティを辛うじて支えているのが現実である。

しかし、つぶさに見ていく中には外部の人々との交流を通して活力を維持しようとして努力されている人々もおられる。そこには地域活性化の取り組みを主導するリーダーやグループの存在がある。

地域特産品の開発、販売、Uターンの支援、今日都市在住者の中にも農山村での生活を希望する人達が増えている。そうした人々への住宅の斡旋など、行政を交えた地道な取り組みが必要だと想う。

物質的な豊かさを競う時代が終り、人々は心の豊かさを求め始めているこの時代、絶好の機会だとの想いをする。

日本の食糧の自給率が四十パーセントにも満たない現実、このままでは日本の食文化が破滅します。豊かな自然と人々を心暖かく迎えてくれる人情、そうした農山村を守り都市と田舎の文化を融合した新しいコミュニティを創造してゆく。この事こそが日本を永続させてゆく原点になるとの想いを致しております。

農山村の豊かな原風景をのこし守って行く事を切に願っている。郷里をこよなく愛し祖先そして父母たちが眠る越後上越に想いをはせ一助になればと筆を取った次第です。



生家より写す(三和区弘沢)平成20年10月18日8時



生家より写す(三和区弘沢)平成20年10月18日17時



大坪満男さん